



News! the 世界遺産

いざかまくら塾
第2回

永井路子さん講演「今、鎌倉をかえりみて」

直木賞受賞作「炎環」の舞台となった釈迦堂口遺跡と中世鎌倉についての講演「今、鎌倉をかえりみて～衣張山のふもとの景観と釈迦堂口遺跡～」が5月24日(日)、大町6・7丁目自治会(現・衣張山自治会)といざかまくらトラスト、推進協議会の共催により、きらら鎌倉ホールで行われました。定員280人の会場は満席となり、作家として、鎌倉の歴史と世界遺産について語る永井さんの軽妙な語り口に沸きました。以下は講演要旨です。

◎伝説の皮をむく

環状七号線の工事のため東京の家がとられたので、鎌倉山に家を建てて住んだ。鎌倉のことを小説に書くためということではなかった。最近「岩倉具視 言葉の皮を剥きながら」を書いたが、言ってみれば伝説の皮をむくのが面白くて、歴史小説に取り組んだ。日本における変革の時代とは何なのだろう。それは鎌倉ではないかと前から考えていた。思いがけないことが出てくる鎌倉の歴史に取り組んだ。釈迦堂口遺跡とやぐら群は大変な文化財なのに、文化財として指定されていないのは驚きである。やぐら群のような重要な文化財を指定しないで、何が世界遺産登録かと言いたい。

◎世界遺産

はじめは世界遺産は経済的に困難な状況にある文化財保存の手伝いをするということだったが、世界遺産の初期の思いがねじまげられている。観光資源としての価値があがるのでないかとみられるようになった。廃墟のようなところでも、世界遺産になるとみな行くようになる。人寄せのために世界遺産になりたいという心情があるとすれば、いただけない話である。

◎武士団の誕生

空気の色も東と西とでは違うといわれる。京都の方は優雅でお金持ち、東国は貧乏で、空気の色さえ全く違うと見られていた。東国は年貢をおさめ、西国は吸い上げるところだった。しかも東国は土地が瘦せていた。農民たちは農業器具を改良し、水を引いてたんぼをつくることを考えた。土地が大きな財産だということに気がついた。土地をめぐってけんかや戦いが起きるようになってしまった。でも無限に争っていては何もない。だからみなで自動制御して仲良くしようということで、農民の大連合ができた。そこに棟梁として担がれたのが源頼朝だった。非常に難な言い方だが、これが武家政権の始まり、中世の始まりとなった。



◎乳母の力

三浦一族は頼朝との縁があったので、旗揚げにあたっては中心になった。北条氏は伊豆の小さな豪族だった。北条政子が頼朝と結婚し、源氏の旗揚げにも参加した。鎌倉武士もなかなかしたたかで、鎌倉時代の半分ぐらいまでは三浦と北条はにらみあっていた。比企一族も北条にとって恐ろしい相手だった。比企尼は頼朝の乳母として大きな力を持っていた。天皇家でも乳母が政治的な駆け引きにも影響をあたえた。



頼朝と政子の間に実朝が生まれると、政子の妹の阿波局が乳母になった。つまり実朝を後継ぎにするために、いろいろ手を打った。頼家は比企一族の若狭局と結婚し、一幡が生まれた。頼家の次は一幡となると、北条は力を失う。そこで釈迦堂口の名越邸で若狭局の父親比企能員の謀殺に至り、比企一族は滅んだ。

◎険しい世界遺産への道

名越邸には様々な歴史がからんでいる。良きにつけ、悪しきにつけ鎌倉のすべてが入っている。オリジナルでなければだめだというのが世界遺産の特質である。鎌倉でオリジナルなものとは何か。大仏だけではちょっと辛い。だが日本の中世は鎌倉である。世界遺産への道は険しいと思うが、鎌倉は、中世にとってめざまい歴史の変化のあったところなのだということを売り込まないといけない。私も及ばずながら、お力にはなりたいと思う。

【質疑から】北条政子の生き様に共感

鎌倉の女性としては、北条政子に興味がある。将軍の御台所に出世したからではなく、小豪族の家に生まれた田舎娘が、はだしで歴史を歩いているところが面白い。尼将軍といわれているが、将軍にはなっていない。弟の義時は、政子を頼朝の身代りとして歴史に押し出したが、何とか重荷を背負って生き続けた。